

千島の想出(Ⅲ)

館脇操

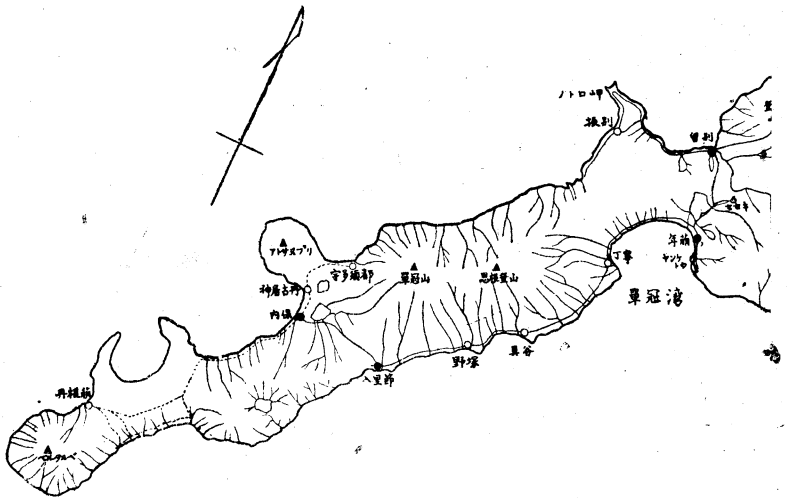
擇捉島

i 擇捉島概況

擇捉島は千島最大の島で長さ二〇三軒、幅二九軒、面積は二四〇八平方軒ある。長さ二〇三軒といへば札幌と名寄間の直線距離にほど相當するから、一度島に入つてしまふと全く島の感じがしない。

全島に火山が多く、東面から見て行くと、東南端のベルタルベ岬にはベルタルベ火山(一、三四二米)、内保灣の北角には富士型を呈したアトサマブリ(一三、四〇米)があり、その東にこれも富士型をしたヒトカツプ山があり、中央留別の東南にはオタモエ硫黄山(一、一九八米)、留別灣につづく沙那灣の北方にはチリツプ山(一、五二八米)があり、島の東北端近くにはラツキベツ岳(一、一九五)硫黄山などがある。

本島はオコック沿岸に出入が比較的多く、北か



らしいと薬取、沙那、留別、振別、内等の錨地があるが、いづれも大体北がひろくあいて良湾とはいえない。たゞ沙溝部が三百噸級までの汽船には良港であつた。太平洋岸は大きく見ると、中部にヒトカツブ（單）灣の灣入があるのみで、それも南面をひろく開いた曲浦型である。

中部千島に通つていた農林省の監視船の人達は「擇捉島まで来ると北海道に歸つた氣がする」とよくいつていたが、これはひとつは風物から受ける直観である。事實擇捉島で、北海道に普通な植物の分布の終るものが澤山ある。樹木に一例を見るとトドマツ、エゾマツ、ヤマラシ、ドロノキケヤマ、インノキ、シラカンバ、ミズナラ、アズキナシ、シロザクラ、シウリザクラ、ヒロハノキハダ、ヤマナラシ、イタヤカエナなどで、これらのものは得撫島に行くともう産しないのである。この間の植物を精査して、筆者は擇捉島と得撫島との間に「宮部線」を確立し、眞正の東亞温帯植物區系はこゝに終ることを指適したのである。

ii 擇捉の横顔

私が始めて擇捉島に行つたのは昭和二年八月二十四日である。この時には色丹から年朧に農林省の

監視船得撫丸で直行したので、斜古丹を出たのが、午前八時頃であつたと思う。天氣がよかつたので、甲板に出勝であつたが、擇捉と色丹の間のウネリはさすがに大きく、非常に和ぎの日であつたにもかかわらず、船は大きく傾斜した。チューメートは笑いながら「先生大丈夫かな」と人のよい笑を口えにうかべつゝ、それでもどこからかい氣味の影を眼にひそめつゝ私に話しかけた。その時ノートにかきつゝつておいたものをお笑草ながら紹介しておこう。

まぐる群朝潮の上に躍りつゝ

色丹沖のうねり秋初む

擇捉の天寧沖に差しかゝつた頃からパロメーターの針かかなりさかつたので、一寸用を足してすぐ出港の所の豫定を年朧では二丁アンカーを入れ、船は腰をすえてしまつた。そして年朧に入る前から船はずつかりその船体をガスにつゝまれていた。そこで風のはげしいうなりを聞きながら二日を過した。船は碇泊位置がよかつたのでローリングしていたのみであまりひどい動揺もうけなかつたが、中部千島の初航の出花のこの風景は、私にかなりな陰惨な印象をあたえた。静まりかけた三日目の午過ぎ、船長が捕鯨會社に行くといふので、一諸にボートに乗せてもらう。ドンヨリと

した低い柱ぶき屋根が一行に並んだ年朧の部落は砂にまみれたような感じであつた。附近を歩く。

暴風雨避けて鯨捕る船並びおり

二百十日も間近しと聞く

洗はれし甲板の水ひやりと

足にしみくる暴風雨の朝はも

鯨場にひきあげられし船底ゆ

音なく虫の這い出でにけり

擇捉沿岸航行の二度目の印象はかなり深い。それは昭和三年七月下旬のことである。根室を出發して擇捉航の時の私の日記には次のように記してある。

微風に軽いローリング、農林省の監視船ウルツプ丸は擇捉のオコツク沿岸南部内保の沖を通つて綺麗な富士形の火山アトサヌブリをまはりはじめた。七月とはいへ、オホツークの夕暮はさすがに涼しい。南千島の風貌は、北海道本島より大きく粗く、森林、山肌、海岸線、そうしたものに眼をひかれていたが、蒼茫たる夕暮がいつか海に心をまとめさせようとしていた。

「あ、船らしい」突如、私の傍を通りかゝつた一等運轉士のT氏が海面のあなたに眼をやつた。急に甲板に聲が群れ出した。瞳をこらせばどうも發動機船が莖

旗をあげているらしい。船はフルスピードでその方へ向けられた。正しく救助をもとめていることが機船の上の人たちの動きに依つて示された。やがて舷側近くうねりにのつて漂流せる五人乗りの船は全く視野に入つた。

「宇多須津を出て根室へ行く途上、機械に故障を生じて……」船上から大音聲が送られ、ロープは監視船から發動機船に投げ與えられた。結び終ると、船長はたゞちに「スタンバイ」をかけ動き出した。

アトサヌプリを廻れば宇多須津の入江だ。發動機は本船にひかれたまゝ、灯のうごきそめた灣深く入つてゆく。そしていつか満月の夜が、すべてのものを清澄な浮彫にした。船は或る地點で盛んに汽笛を吹きならした。やがて村人の駈け來る姿が見え始めた。發動機船の人たちの合圖はまもなく村人の眼に入つて向うで手を振つた。ウルツプ丸はもう一度あらためて汽笛を鳴らして繩を放し、大きく弧を描いて船首をめぐるした。

灣を出ると船は再び軽いローリングに、月明のオホツク海を北上しはじめた。船の人は今し方の出來事については何事もしなかつた様に、(そしてそれから「船を救助した事」を語る人もなかつた)黙々と海の

仕事をつゞけた。私はしんみりと海の好もしき香を感じた。そして碌でもない誇張された街の親切を反省せずにはいられなかつた。海のひらき胸、それがにじみ出る船人の心を自分も持ちたいと念願せずにはおられなかつた。

擇捉 再遊

二百十日のシケを避けて擇捉の東前年崩に入つてから十四年になる。去年は根室で柄にもなく体を痛め、擇捉にひとり旅行く吉村君に別れてひとり札幌に歸つて來た。今年は是非ともと八月二日札幌發、野付半島をまわつて根室に出たのが六日の夜、それから十日迄は船待、船は帆まかせ、帆は風まかせと云うが、船にも乗れない私は何に任かせて好いやらと少しグチめいてみたくなつた。十日はお祭り、着飾つた子供の明るい顔を街に残して晝食後乗船する。好く御厄介になつた農林省の監視船白鳳丸とウルツプ丸とが仲好く二艘並んでいる。我等の乗船松山丸は夕刻出帆、十一日には北西岸(島では西前と云う)の内保につく。海峡で少し揺れたが後は絶好の航海日和。内保からは島沿ひに所々思ひ出した様に船は漁場に付けつゝ、アトサヌプリ、ヒトカ、ツブ山等の素晴らしい山容を私達に樂しませてくれた。(この稿續く)(北海道大學教授)